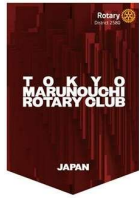


東京丸の内ロータリークラブ

2020年9月2日 第59回 例会議事録



T O K Y O
MARUNOUCHI
ROTARY CLUB



「笑おう—好奇心と実践—」
Laughter—through Curiosity and Participation—

2020-21 年度クラブ会長
嘉納英樹 Thurgood Kanoh

“Rotary Opens Opportunities”

2020-21 国際ロータリー会長

ホルガー・クナーク

「ロータリーは機会の扉を開く」

2020-21 第2580地区ガバナー 野生司義光



【式次第および議事録】

◆ゲストウェルカムデー◆

～オープニングムービー～

1. 司会進行 今井 菜美子 幹事
 2. 開会点鐘 嘉納 英樹 会長
 3. 四つのテスト 玉木 仁 直前副会長
 4. ゲスト・ビジター紹介 寿原 裕美子 会員
尾崎 由比子 直前会長
- ①早稲田大学大学院 日本語教育研究科 教授
小林 ミナ 様
 - ②alakai 九星気学カウンセラー
高橋 由珠 様
 - ③Capbridge Investors,K.K. アドバイザー
Mike Corry 様
 - ④ボデイトレーナー
猪又 由美 様
 - ⑤吉田秀樹写真美術研究所 代表取締役
吉田 秀樹 様
 - ⑥株式会社コスモ・コミュニケーションズ 取締役副社長
岡部 真弓 様
 - ⑦スポーツクラブ NAS 株式会社 執行役員
白井 奈美 様
 - ⑧株式会社プロスダイニング 支配人
濱田 慎吾 様
5. ニコニコ報告 鷺澤 充代 会計
・鷺澤充代 会計
・尾崎由比子 創立会長
・藪口真太郎 会員
 6. 会長挨拶 嘉納 英樹 会長
・クラブ概要について
・9月お誕生日(寿原会員)
 7. 幹事報告 今井 菜美子 幹事
・理事会および委員会報告(高木会員) 他
 8. 出席報告 古山 真紀子 会長エレクト
・出席者:9名、欠席:0名
・出席率:100%
 9. 卓話 【右参照】
 10. 今後の予定 尾崎 由比子 直前会長
 11. 閉会点鐘 嘉納 英樹 会長
 12. 写真撮影

【卓話】

早稲田大学大学院 日本語教育研究科

教授 小林 ミナ 様

『外国語として出会う日本語』

(以下、小林様) ※別 PDF データあり

私は今早稲田大学の大学院日本語教育研究科というところで教員をしております、2019年から20年にかけてというのは、在留資格の変更、日本語教育が新聞の一面に初めて掲載、日本語教育の推進法がちょうど成立など、画期的な年でした。そこで教員をする傍らで、公益社団法人の日本語教育学会の業務執行委員の副会長をしております。

本日はまず、「日本語教育って何だろう」、「日本語ってどんな言葉なの?」の2本立てにしたいと思います。

その前にちょっと自己紹介をさせていただきたいのですが、1980年代に青山学院大学の文学部日本文学科で国語学を専攻しておりました。その前の青山学院の高等部で岡部さんと同級生で聖歌隊に入っておりまして、毎日一緒に賛美歌を歌って、年末はメサイアを歌うという高校生活を送っていました。その頃から、日本文学よりも日本語学、国語学の方に興味があって、日本語を教えたいと思ったのですが、その当時日本はバブルという、今は懐かしい華やかな時代でございまして。1番最初はドイツ人の銀行員、安田信託銀行の外為のところにいるドイツ人のビジネスマンにプライベートで日本語を教えるというところから出発しました。本当に良い時代で、会社が全部プライベートレッスンのお金を出してくれて、当時私は時給8000円もらって、日本語を教えていました。しかし、問題は、ドイツ人銀行員は勤務時間にも教えないといけないので、人が働いてない時間にかばんを抱えて通うということをしていました。

もう1つは中国帰国者、在留区民とか、残留孤児だと思えますが、日中国交正常化で帰国する人がすごく増えたんです。その人たちの定住促進センターというのが所沢にできたのですが、そこで受け入れてもらえるというのは、何親等だとか、かなり限られた人。だけれども、多くの方はそこで受け入れられない範囲の人たち、中国で結婚した、結婚相手の親族とか、大量に帰国するわけです。そうすると、それは所沢では受け入れてもらえないので、その人たちのためにボランティア教育というのが、特に東京、埼玉でたくさんできて。そのボランティア教育のボランティアで日本語を教える。ただ、そこは日本語を教えるというよりも、例えば教室に来たら、自分の机に前を向いて座る、授業中は立ってはいけないなど、そういうところから。自分の国、中国で学校に行っていなかった人たちがいるので、そういうことをしていました。

もう1つは就学生、在留資格、当時は日本語学校にいる学生は就学生という名前だったのですが、そこでまともな日本語学校と怪しい日本語学校で日本語を教えていらっしやる。まともな日本語学校というのは日本語能力試験に合格して、進学したり、就職したり、ちゃんとしていたのですが、怪しい日本語学校というのは日本語学校の学生がたくさんいるので、それで在留資格を取って、就労してお金を稼いで、自分の母国に送金するというのが目的の学校でした。私は、ボランティアやプライベートでやっていたので、1番下では初めてこう時給、お給料をちゃんともらって教えられるということで、当時は何も不満はなかったのですが、その怪しい日本語学校の人にはですね、教育・経営マインドなどがあまりありませんでした。その際、日本語を教える仕事は一生したいけど、法に触れない形で続けたいと思い、大学院に行くことを決意しました。

それを機に名古屋に行くのですが、名古屋大学の大学院に入りまして、そこで修士、博士と助手まで6年在籍しました。専門は日本語教育ということを申し上げるのですが、日本語教育の中でも文法研究、文法教育、コースデザイン。日本語のコースをどんなふうに、どういう科目を立てるのか。あるいはマルチトータルコミュニケーションというのは言葉だけではなくて、非言語とか、動作とか、そこにある人工物。今私はスライドを使っていますが、トータルでコミュニケーションをこんなふうに乗っているのかということを専門としています。

そういう学生をする傍ら、ランダン大学と日本福祉大学というところで留学生に日本語を教えていました。ランダン大学ってみなさんご存知だと思いますが、上智大学と姉妹校、校風がすごく似ているのですが、そのランダンで学生しているのが、ほぼ北米に日本に1年間留学できるような良いお家の子供たちでした。

日本福祉大学の方は経済学部の中国人留学生で、本当に自分でバイトをして学費を払っているような、対照的なところで教えていました。

一方で名古屋大学と名古屋YMCA語学院で日本人の学生に日本語教授法を教えるということをしていました。実際外国人に日本語を教えるということと、日本語教師を育てるということをしていました。その後、北海道に住むのですが、北海道大学の留学生センターということで、国立の拠点なものですから、当時の文部省と奨学金制度で奨学金をもらって、日本の大学の大学院に進学するというものでした。

その後、2006年に早稲田に移ったのですが、早稲田の方ではメインでは日本の教師養成の方で、それがもう仕事が8割、9割。日本語教育研究センターで日本語を教えるということが1割、2割という仕事をしております。

ざっと経歴を話しましたが、そもそも日本語教育とは何かということなのですが、狭い意味と広い意味が2つございます。

一般的に通じるのは狭い狭義の方だと思うのですが、外国人とか、日本語を母語としないものに対する日本語の教育。こういうふうに考えますと、国語教育。日本人の子どもたちの国語教育は含まれない、狭義の方では。それから、日本人には国語教育、外国人には日本語教育という区分になります。ところが、広義の意味ですと、日本語の教育とすると、国語教育も含まれる、外国人の日本語教育も含まれる。あるいは社会人に対するビジネスマナーとか、敬語講座とか、そういったものも全部含まれるということになります。一般的な意味はこれなのですが、私自身は下のふうに捉えて。今の私が副会長をしています日本語教育学会というのは1962年に立ち上がった、私と同年です。その当時は外国人のためのというのが頭についていました。そうしないと、日本語教育と言われると、なんのことも世界には全く認知してもらえないということでした。それが76年に社団法人、外務省と文部省の、社団法人になるのですが、その時に外国人のためのというのが取れて、日本語教育学会になった。ですから、72年でそこから帰国者が入ってきたりしていますので、この頃にはほとんど日本社会では日本語教育と言えば、「なんとなく外国人に日本語を教えているでしょ？」っていうのが周知されてきたのではないかと思います。

このように考えると、非常に確立したものなのですが、この外国人とか日本語を母語としないものというのも結構曲者でして。じゃあ、一体誰だという話になります。これは去年の12月のデータで

すが、在留外国人、外国人登録をした時には日本の場合は293万人いて、その1年間で20万人増えていて、日本の人口の2.3%。100人の人がいたら、大体2、3人は外国人がいるということです。在留資格を見ていただきますと、技能実習が下の方の形に、ちょっと新しいものなのですが。じゃあ、日本語教育の対象が293万人なのかと言うと、そうではなくて。例えば、永住者とか、特別永住者というものは在日の人たちで、日本語を勉強する必要はないという人もいるわけですね。だから、じゃあこの人たちが日本語教育の対象なのかと言うと、きっちり待遇していない。それから、これは海外の例を見てみますと、海外の日本語教育は国際交流基金が配布しているのですが、海外で日本語を学んでいる人がどれだけいるかという、2018年の統計ですが、大体4000万人いるんですね。380万人いて、1年間で20万人ずつぐらい増えていっている、おそらく2020年は400万人を超えるだろうと言われていいます。しかし、これどうやって数えたかと言うと、海外の大学とか日本語学校にアンケートを配って回答してもらっている、学校に通っている人しか数えていません。そうすると、1人で古典教師に学んでいるとか、中国に多いのですが、ラジオ、テレビなどで独学しているなど、そういう人たちが漏れちゃって。それはおそらく、380万人の10倍とも、100倍とも言われています。ですから、学校に通っている人は400万人だけれども、実際に学んでいる人というのは2000万人とか、4000万人とか、そういう数があるのではないかと思います。

早稲田大学の場合はどうなるかと言いますと、早稲田大学というのは日本の大学で今一番留学生の数が多き大学です。1年前の記録なのですが、早稲田大学に在籍する外国人学生というのは6124人います。この外国人学生というのはパスポートが日本じゃないということで、日本に住んでいたり、早稲田大学に入るために日本に入国したり、いろいろなケースがあるのですが。外国人学生は6000人。私が日本語を教えている日本語教育研究センターというところでは、日本語の科目が1週間に600コマ開講されているのですが、そこを登録している学生が2282人います。ところが、登録者の順位を見ていただくと分かるように、1位が中国、2位が韓国というのは分かるのですが、5位に日本国籍の人がいます。そうすると結局、パスポートは日本はだけれども、親の都合でどこか海外に行き、そこで生まれ育って、現地の学校で勉強していた。で、日本のパスポートで日本に帰ってきたけれども、大学生活を日本語で送るのはちょっと厳しいから、日本語を勉強するというようなケースもあります。例えば、今テニスの大坂なおみ選手です。彼女、ネイティブランゲージは英語ですが、国籍が日本だからというけれども、外見は所謂日本人ではない。そうすると、血筋がどうということ、パスポートがどうということ、母語が何か、第一言語が何かということがずれているケースがあるということ。私たちは肌で感じていると思うのですが、日本国籍が5位に入るぐらい、当たり前のことになっているということになります。

これは大学生のケースなのですが、もう一方で子どもたちの様子を見てみますと。今公立学校でも外国人に外国でルーツがある子どもたち、サポートが必要な子どもたちというのもいるのですが。これちょっと文字が小さいのですが、平成20年、22年、2年ごとになっていまして。この青い部分が外国籍で、緑の部分が日本国籍です。そして、1番右の平成30年を見ていただきますと、大体5万人ぐらいの子どもが日本語のケアは必要なのですが、1万人は日本国籍です。5万人いるうちの4万人は外国籍だけ、1万人は日本国籍。とすると、小中高と公立学校でも、20%は日本国のケアが必要ということになります。そう考えると、日本語教育は外国人のもので、国語教育は日本人のものという分け方がある意味ちょっとナイーブで一体それはどこで線を引くのかというのが、難しい現実があるというのがござります。

それを踏まえて、私の専門の方にいきます。“難しい日本語ってなんですか？”と聞くと、よく“敬語じゃないですか？”とか、“助詞じゃないですか？”“動詞の活用じゃないでしょうか？”などと言われるます。

例えば1番、“社長は休憩時間にコーヒーを召し上がります。”敬語自体は正しいのですが、“社長は休憩時間にコーヒーをいただきます”、“召し上がり”という意味ではちょっとだめですね。だ

けど今、3番なんか“どうぞ、コーヒーをいただいでください”、グルメ番組なんかで“どうぞ、ゲストのみなさんいただきください”なんて普通に使われています。例えば4番で“犬がボールをくわえて走っている”というのは形の上では問題ないのですが、5番、“犬をボールがくわえて走っている。”“くわえるもの”が逆になっています。でも、たぶん5番を耳にしたとしても、なぜか“今ボールが走っている”と思わなくて、“犬って言い間違えだな”と文脈の中で判断すると思います。例えば、“犬がボールをくわえて走りている”というのを聞くと、書いてしまうと間違っているのですが、私たちは強く発音しないことがたくさんあります。

こういうものが敬語とか、助詞とか動詞の活用は難しいですか？と言われるのですが、コミュニケーションという観点からいくと、もっと問題が深刻なのが現状です。これは何かと言うと、クラス分けをするのにある学生を呼んで、日本語で会話をするということをしていた。“出身は中国のどちらですか？”と聞くと、“そうですねー北京です”って回答が返ってきた。これおかしいですよね。2番目は“お正月、海外なんですって？”、“海外と言っても、なんとかなんですよー”、あ、“そうなんですか”のなんとかなには何が入るか。“海外と言っても、出張なんですよ。”“海外と言っても、モナコの別荘なんですよ”と。今みなさん笑いましたよね。笑うってすごく大事で、文法研究というのは境目を見つけるのが仕事なんです。どういう答えでみんなが笑ったり、怒ったり、スルーしないで、どういふものだと受け入れてもらえるのか、境目をお聞きするのですが。この学生というのはすごくよくできる学生なのですが、本当にこういうふうに答えたんですね。よくできる学生なので、後で“あの時こういうふうにしたの覚えてる？”と言ったら、本人は面接のこと自体は忘れてるけど、その時の私だったら、こういうふうにしたらどうだろうと言ってますね。“どうして？”って訊いたら、この学生はずっと中国で初級を勉強してきて、中級で日本に来たのですが、どうも中国の学校で勉強した日本語とみんなが使っている日本語が違うよだということに気がついた。1番気がついたのは日本語の授業では先生に質問されたら、パッと答えなきゃいけない。例えば、“昨日何を食べましたか？”“りんごです”とか、“旅行はどうでしたか？”“とても楽しかったです”ってパッと答えないといけないけど、実際に日本でテレビを観てたらしいのですが、テレビでレポーターが道を歩いてる人に“安倍政権についてどう思いますか？”とか言うと、即答せずに“そうですねー、まあ、とか、あのー”それに関してはってワンクッションを置いて答える。で、彼女はどうもパッと答えるとだめで、ワンクッションを置くのが自然な日本語だと思った。そこで、“そうですねーとか、あのーとか、えっとー”というのを学んだ。そこまではいいですが、ここでそうですねはおかしいですよ。例えば、“ご出身は中国のどちらですか？”“北京です”と言われれば、そうなりますよね。だから、“なんであの時えっとーとかあのーを使わずにそうですねって言ったの？”と訊いたら、“だって先生、先生と話す時はですますだから、そうですねでしょ。お友だちと話す時はあのーとかえーとでしょ”と答えが返ってきたんですね。それだけできる学生だけれども、“ですますがついているから先生”と、“えーととかは友だち”という文法を自分の中で作っていたという。あるいはこの、“と言ってもなんです、海外と言っても、出張なんです、日帰りなんです”。ハワイはどうでしょう。“海外と言ってもハワイなんです”と言うと、“なんだハワイよくあるよね”ってパターンか、“ハワイの何が不満なの？”という感じか2つあると思います。このあたりの文法で、“そうですね”というのはどういう意味があるかと言うと、“そうですね”というのはいよどみの表現なんです

が、今までのそのことを考えたことがない、今初めて考えた。それから、自分が思考した結果を伝えるという時に使うので、何か事実を思い出して話す表現ではないですよ。例えば、就職の役員最終面接で“どうして我社にエントリーなさったんですか？”と聞いて、“はい御社の設立理念に共感しました”と言うと思うのですが、“そうですねー御社の設立理念に共感しました”と言うと、“ちゃんと調べておけよそれぐらい”と思いますよね。やっぱりその場で答えてはいけません。しかし、2番目ですね。“自分を井に本当に例えると、何井だと思いませんか？”と訊かれて、“はい、天井です！”と言うと、“そんなことをしてるの!？”と裏感がある。だから、就職試験だからそうですねが良いとかだめではなくて、就職試験のエントリーの理由だとだめだけど、その場で“え、そんなこと初めて聞きました”だと、“そうですね”がオッケーになる。このあたりが“そうですね”の背景にある文法。こんなことを私は毎日研究しているので。“と言っても”というのは、“Xと言ってもY”という時にXから普通に連想させることを覆すという文法です。そうすると、海外旅行から普通に連想すると言うと、楽しいとか、非日常とか宿泊とか時差。あと、日本語が通じないとか、両替とかパスポート。そういうものを連想します。ですから、“海外って言っても日帰り、出張なんです”と言うと、“あ、楽しい非日常じゃないんだね”とか。“海外と言っても、日帰りです”とか、“1泊なんです”“なんだ、ちょっと慌ただしいわね”となるんですが、“海外と言ってもなんとかなんです”に何を入れますかと言うと、驚くほど違う答えが出てきますね。“釜山なんです”って言うのは福岡でセミナーをした時に福岡の日本語教師に訊いてみたら、釜山が出てくるんですね。それはなぜかと言うと、福岡からビートルというヘリみたいなので釜山にパッと行けて、福岡の人は釜山にそれで出かけて、晩御飯を食べて帰ってくるというのを普通にしている。だから、海外と言っても釜山なんですっていうのは福岡だとありえる。同じようなことを札幌でやったのですが、“北方領土なんです”と言うと、ビザなし渡航とかかわりて行きやすいので。“海外と言っても、北方領土ってなんだー”ということなんです。誰にとっても普通なのか違ってくるので、普通を裏切ると言っても、その普通が違ったら全く通じないとか、嫌味な人ねというふうになってくる。

コミュニケーションの観点から文法を見ますと、例えば外国人が“犬がボールをくわえて走ってる”と言ったとしても、“この方は日本語が上手じゃないんだな”と思うけれども、その人の資質とか常識を疑ったりはしないですよ。この人は押しが強いなとか、“この人は人を流すんじゃないかな”とは思わない。けれども、面接、就職試験の面接で“そうですねー御社の理念に共感しました”と言うと、日本語ではなく、“この人準備不足なんじゃないか”とか、“不真面目なんじゃないの？”という印象を与えます。“海外と言っても、ハワイなんです”と残念に言っても、不真面目とか、金持ちとか、言葉じゃない価値観なり、常識なりを抱えてしまいます。そうすると、“ボールをくわえて走ってる”とか、“走ってる”とかの形の間違えは間違えていると捉えられるけれども、下のような例は間違いない部分、その人の人格とか資質とか、そういうものに意識が向きがちで、かつ日本人同士だけでいつも話していると、そういう返しがあるとは思わないので。実は、形の間違えよりも、こういう人の方の“そうですね”とか、“と言っても”のような間違えの方がすごく深刻にコミュニケーションをと考えると、こういうコミュニケーションって母語話者同士でも結構あって。お金持ちの奥様が“海外と言っても、いつものモナコの別荘なんです、同じところばかりで飽きちゃう”とか言う、すごく嫌な感じしますよね。わざとそ

うやってマウントかけたりすることもあるのですが、そういう意味ではこういうことまでを考えると、外国人だからどう、日本人だからどうって分けるのは本質ではないというふうに考えを私自身が日本語教育を広い範囲の、日本語の教育として捉える、立場を取る、そのあたりにいます。

◆作成 : 今井

◆別 PDF : 小林様作成データ